

天地

ネットワーク テーブル 494号

天地シニアネットワーク 2019.5.3

1

TENTĪ TODAY			1
会員の広場 「手賀沼の白鳥」			2
歴史	米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち(7) その3: 第3代大統領トーマス・ジェファソン	佐川 雄一	2
考察	中国人から見た日本人の言語表現心理(2) <気をつかうこと>	兪 彭 年	5
考察	満州を考える(3)	加藤 幹雄	7
考察	160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人 その1. 極東の果てに見た洗練の文明国	臺 一郎	10
回顧	海外での思い出(2) アテネ(2)	森永 善彦	11
座談録	「静聴雨読庵より」 サロン・ド・ミュージック・クラシック(6) (7)モーツァルトの協奏曲	尾関 陽四	12
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		14
事務局			15

TENTĪ TODAY

少子化が大問題となっている中、幼児、子供の殺傷、虐待など最悪の事件が発生し、大変心配です。単なる事件で済まされないような、社会的な根深さを感じます。増える一方の高齢者、負からプラスへと社会の思考転換が必要です。定年などという言葉は、死語になるべきです。

傘寿に近い橘さん、市の福祉協議会に登録して、近くの小学校で校庭の清掃維持、維持を受け持っています。週に2~3回でかけるとのことですが、朝、子供たちから「かんちゃん先生おはようございます」と声をかけられるのが嬉しくて学校へ行くのが楽しくてしょうがないと、小学生と同じようなことを言っていました。生きがいは、身近にあるようです。

大相撲夏場所、トランプ米大統領から記念杯が渡されましたが、優勝者が日本人力士で最高でした。もし、栃の心、あるいは白鳳だったならトランプ大統領のコメントが変わったのでは・・・と想像するのですが。

日本滞在中の日本政府、安倍首相の気遣いがよく伝わりましたが、外交交渉はトランプさんの方が一枚上手という印象が強く残りました。

兪彭年著「中国人から見た日本人の言語表現心理」、関心のある方に順次送っていますが、残部ありますのでお申し出ください。本は、著者から無償で提供受けていますが、中国通で兪さんをよく知る某氏は、4－5千円してもおかしくない本と言っています。送料をお願いしたいので、一応、千円いただくことにしています。中国、中国語に関心のある方、どうぞ

スマホにSMSで「なんで早く帰ったんだよう」というメールがありました。まったくあり得ないメールなので、直ぐ削除しましたが、発信者の携帯番号の下4桁は、自宅のもの。どこでどうなっているのかわかりませんが、嫌な世の中になって来ました。気を付けましょう。

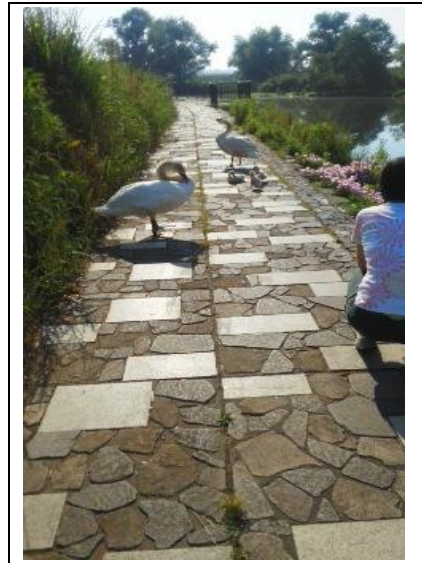
会員の広場

「手賀沼の白鳥」 北川新十郎さんからの提供



(恋人探し中)

(求愛・相愛)



(家族誕生)

会員の作品

米国の統治の仕組みと大統領制、と建国の父たち（7）

佐川雄一

2. 建国の父たち（3）

2-3. 第3代大統領 トーマス・ジェファークソン



トーマス・ジェファークソンは、1743年4月13日、ヴァージニアの農園貴族の家で生まれる。彼の職業は弁護士であるが、生来、多彩な能力を備えていたので、彼の職業的タレントを象徴する言葉は多数ある。歴史家、自然科学者、哲学者、音楽家、科学者、政治家。建築家としても著名である。代表作として、自宅（Monticello, 小さな山）の設計・建設と、信仰、宗教を問わず入学が許される公立のヴァージニア大学の設計・建設が挙げられる。「自由が享受される社会では、（誰もが）学びながら成長できる」とする人生哲学を生涯、座右の銘として、ヴァージニア大学を創設した。

トーマス・ジェファークソンが、歴史に名を残したのは、独立宣言の起草である。彼は、独立宣言の中に、「奴隷所有者に対し奴隷の開放」を呼びかけることを考えたが、反対意見が大勢を占め、残念ながら実現しなかった。ジェファークソンは、奴隷制は悪であると言いつづけたが、自分の農園には多数の黒人奴隷が働いていた。当時の農園はどこでも多くの奴隷を所有していたが、それにしても、なぜ「自説と実践」が食い違っていたのか、その真相について今日も議論されているという。

妻：マーサが33歳で死去した後、ジェファークソンは、妻：マーサの父親：ジョン・ウエイレスと黒人奴隷との間で生まれた女性：サリー・ヘミングズとの内縁関係ができ、6人の子供が生まれた。

当時、ジェファークソン（The Democrat - Republicans、後の民主党）の反対党：The Federalists（後の共和党）から、二人の関係について真相の解明を求められたが、ジェファークソンは事実を否定もしなかったが、事実でないことを反論することもなかった。1998年、科学者が、トーマス・ジェファークソンとサリー・ヘミングズの子孫のDNAを調べ、当時の記録を探っ

て調査したところ、二人の関係が事実であることが確認された。つまり、妻 マーサと内縁の妻 サリーは異母姉妹であったわけである。

ジェファースンは、独立宣言の起草者として名を残すが、これ以外にも当時の2大政党のひとつ：The Democrat - Republicans（後の民主党につながる）の創設者・党首としても米国政党史に名を残している。当時の合衆国人口、400万人の内、90%が農業従事者であったこともあり、ジェファースンは農業こそが合衆国の理念：平等の社会を築く鍵（the nation of citizen farmers）である、且つ人民の税負担を軽減する「小さな政府」につながると主張した。

1789年、ワシントン大統領の政権が発足すると、初代の国務長官にジェファースンが任命された。ジェファースンは、財務長官に任命されたハミルトンと波長が合わず、3年で国務長官を辞任する。

ハミルトンはニューイングランドに支持層を広げる共和党の源流：The Federalists の党首であった。党首：ハミルトンが初代財務長官に就任すると、通商・製造業を振興し、金融・証券市場を育成、防衛力を強化する政策を大胆に推し進める。ワシントン大統領が、国家の健全な発展には、ハミルトンの考えが現実的と判断し、The Federalists の政策を積極的に採用した。

しかし、ワシントン政権の任期途中で退任したジェファースンは政治への関心を捨てたわけではなく、ワシントン退陣後、第2代大統領選挙に立候補する。選挙では1位の座はつかめず、2位となり、第2代大統領、ジョン・アダムズの下で副大統領（1797～1801年）に就任する。1801年、ジェファースンは、再度、大統領選に立候補、ジョン・アダムズの2戦を挫き、第3代大統領に選ばれた。副大統領にはニューヨーク出身のアーロン・バーが就任した。

ジェファースンの大統領任期中の最大の功績は、フランスからフランス領ルイジアナを買収したことである。当時の買収価格は、15百万米ドル。これによりミシシッピ河の西に広がる214万平方キロの領土（日本の6倍弱）を確保することができた。

この時、野党：The Federalists から、合衆国憲法は、外国政府が保有する領土の購入権を大統領に認めていないと反論が出た。これに対し、ジェファースンは、合衆国憲法には、大統領に外国政府が保有する領土の購入を禁じる条項はないと反論し、フランス領ルイジアナの買収に踏み切った。ジェファースンは、直ちに内陸部調査ミッション（30人以上の専門家集団）を組成、3年余かけて地域の詳細な調査を行った。

トーマス・ジェファースンは、自党：The Democrat - Republicans（後の民主党）の党首として党運営を掌握し、且つ行政府の長としての職務を果たした最初の合衆国大統領であった。ジェファースンの職歴を見ると、州政府で十分な経験を重ね、大陸会議のメンバーとして他州の代表者との接触を深め、さらに外交・閣僚・副大統領の経験を重ねた上で、大統領に就任する用意周到さが伺える。

1743 年	ヴァージニアで誕生
1767 年	弁護士業を開設する
1769 - 74 年	ヴァージニア州議員
1772 年	
マーサと結婚	
1775 - 76 年	大陸会議メンバー（独立宣言の起草）
1776 - 79 年	ヴァージニア州議員
1779 - 81 年	ヴァージニア州知事
1782 年	妻 マーサ逝去（享年 33 歳）
1783 - 85 年	大陸会議メンバー
1784 年	渡仏、米仏通商協定の締結準備
1785 - 89 年	駐仏アメリカ大使（ベンジャミン・フランクリンの後任者）
1790 - 93 年	国務長官
1797 - 1801 年	副大統領
1801 - 09 年	大統領
1826 年	逝去、享年 83 歳

ホワイトハウスの生活は、行政の長、外交の長として、多くのパーティを開催するが、妻 マーサを亡くしたジェファーソンには、自分を支えてくれるファーストレディがいなかった。こんな逸話が残されている。国務長官職にあったジェームズ・マディソンの妻 ドリー夫人がファーストレディの役割を果たし、ジェファーソンを側面的に助けたという。

ジェファーソンは、裕福な家庭に生まれたが、死亡時には、約 10 万ドル（現在価値で数百万ドル）の借金を負っていた。なぜ 借金を残したのか、詳しいことはわからない。

因みに、ジェファーソン大統領の年収は、当時のお金で 25 千ドル、現在のアメリカの大統領の年収は 40 万ドルである。 建国期の大統領は、公費の節約に努めるのが日常の習慣になっていたため、私費による公費の補填が多く見られた。そのため、退任後、豊かな生活を楽しむ金銭的余裕を喪失したと考えられる。

中国人から見た

日本人の言語表現心理（2）

兪彭年

気を遣うこと

中国人が日本人と接触して印象深いことはいろいろあるが、その中で一番印象深いのは日本人の大変気を遣うことではないだろうか。それでよく耳にするのが「気が疲れる」という言葉だ。あのよう気を遣うのだから、気が疲れるのも当然であろう。もし中国人も日本人のように気を遣えば疲れるに決まっている。だから日本に長く滞在する中国人は日本人と付き合うのは気

が疲れるとよく言う。郷に入れば郷に従うのであろう。

しかし、中国人はふつう日本人ほど気を遣わない。したがって、中国人は気が疲れるという言葉あまり口にしない。この意味では中国人は日本人より鷹揚といえるのではないか。言葉を変えて言うならば、中国人はやや無頓着で、日本人は神経質だ。

日本人は絶えず自分の周りの人達に気を遣っている。周りの人は自分をどう見ているのかとたいへん気にする。それで自分の意図するように見てもらうためにあれこれと工夫する。身なりや振る舞いや言葉づかいなどにその工夫が現れてくる。いろいろ工夫はしてはいるものの周りの人は自分の意図するようを見てくれているのだろうか、また気を遣う。そこで工夫を考えたりする。このような気遣いが絶えないので、気が疲れて、よく一人でいたくなるのであろう。

たとえば、ひとり静かにいたくなるとか、一人旅に出たくなるとかがある。周りに人がいなく、自分一人でいれば気を遣うこともなく、休めるからだ。つまり、気が休まる。

中国人ももちろん自分の周りの人たちに気を遣うが、日本人ほど気にしない。そして中国人も自分ひとりでいたくなるときもあるが、それは往々にして周りがうるさく、騒がしいからであり、日本人の気が疲れるのとは少々違うと思われる。中国人はやはり自己中心的であり、自分の思うままに振る舞うようだ。

中国人は何人かよると、話す声が大きくなり、日本人には喧嘩でもしているように聞こえるらしい。人によっては傍若無人のように声を高くして話し合う。話す声が大きくなるのは思うままに話しているのであって、周りに気を遣わないからだ。レストランなどでは中国人は大きな声で話をしながら食事をするが、これが日本人の目には中国人には周りを憚る気が足りないと映るらしい。中国人に言わせると、食事をしながら話をするのはみんな楽しんでるのであって、楽しくなればつい声がおおきくなってしまい、みな周りに気を遣ってはいは和気藹々になれない。

総じて、中国人の話す声は日本人より大きいことは確かだ。これは、中国人は周りを憚る気が足りないからだといっても良いが、むしろ気を遣おうとせず思うままに話すからだといったほうが的確なようだ。

それから、同じ気を遣うといっても、中国人と日本人とは違う。中国人は自己のPRに気を遣うのであって、日本人は相手に迷惑ではないか、相手の気を悪くするのではないか、相手は自分をどう思うか、などと相手に気を遣う。この意味で中国人は自己本位的であって、日本人は相手本位的ではないだろうか。もちろん、この違いは相対的であって、個人差もあり、絶対的なものではない。日本人も自己のPRに気を遣うであろうし、中国人も相手の反応に気を遣う。

だいぶ前であるが、日本の新聞を読んでいて公共広告に目がとまり、日本人も変わったのかと思った。広告にはジコ虫（自己中心の人間という意味なのだろう）が増えていると言い、種類はいろいろあって、

・シロクジ虫（周りに憚りなく四六時中携帯電話などを使用している人間を意味するらしい）

- ・センリョウ虫（公共の場所を占領する人間を指すのだろう）
- ・タン虫（やたら痰を吐く人間らしい）
- ・ネツ虫（乗り物の中などであたり憚らずにおしゃべりなどに熱中している人間たちをさすらしい）
- ・ブツケ虫（混む乗り物の中で背負ったカバンなどを平気で人にぶつける人間を指すのだろう）
- ・ろ虫（道路などに人の迷惑などを考えず平気で駐車する人間らしい）
- ・イップク虫（公共の場で人の迷惑などを考えず平気でタバコを吸う人間たちだろう）
- ・メイク虫（公共の場で人が見ても平気でお化粧をして恥ずかしくない人間を指すのだろう）
- ・オキザリ虫（公共の場にゴミなどを捨てる人間たちだろう）
- ・アソバセ虫（公共の場に子供を遊ばせて人の迷惑を考えない人間を指すらしい）が絵で描かれていた。

これらの虫の共通点は自己勝手に、周りへの迷惑や周りが自分をどう見るかなどかまわず、周りから輦蹙を買うようなことをあたり憚らず平気でやる、つまり相手を気にせず、周りに気を遣わないことだ。広告でキャンペーンを張るくらいだから、ジコ虫の数は少なくないのだろう。彼等にとっては気を遣うという日本の伝統文化はすたれたのであろうか。

ところで、「気を遣う」を中国語に訳すと「費心」「労神」「費神」などになるようだが、どうもニュアンスが違う。ぴったりした訳語が見つからないということは、つまり、同じ「気を遣う」のでも中国人と日本人は違うからなのだろう。

満州国を考える（3）

加藤幹雄

二）歴史を辿る

2）満州事変

1931年9月18日、奉天北部の柳条湖で中国人不穏分子が満鉄を爆破したという筋書きのもとに関東軍が奉天城を攻撃して占領。これを契機にして満洲各地の主要都市を占領。あっという間に満洲全土を制圧。関東軍は1万人、勅許を得ないで越境した朝鮮軍4000人と併せてもこの限られた勢力では考えられない大戦果を上げたのは、いくつかの倖倖が重なったからである。

蒋介石は共産軍への対応に追われる。張学良の軍隊15万人は、ほとんど長城南に布陣。張学良は入院中。共に不抵抗を指示。米英もソ連も動かず。

関東軍は当初満州領有を目指していたが、独立国家建設に方針を切り替えた。当時の国際情勢から満洲住民のイニシアティブによる国家を作るという体裁を取らないと猛烈な批判にさらされるという判断。既に溥儀をトップに据えるという構想を準補していた。

※北村喜八郎氏の話（1932-2018）

両親が奉天で繊維問屋を経営。1931年9月某日、軍隊から大量の木綿のさらしを奉天北部の鉄道の指定された場所まで届けるように指示を受けた。そこまで行ってみると鉄道貨車に沢山の兵士が詰め込まれていた。さらしを届けて引き上げたが、決して見聞きしたことは他言無用と厳しく言われた。さらしは兵士が夜間戦闘の時に敵味方を識別する襷にするためだった。両親は事態を知ったのだが秘密を頑なに守った。両親からこの話を聞いたのは戦後ずっと時間が経ってからである。

3) 石原莞爾（1889-1949）

満州事変の筋書きを描いて実行したのは石原莞爾である。1928年10月に関東軍作戦主任参謀として満洲に赴任。それ以前に「満洲領有計画」を準備。彼の構想は日本の将来のためには満洲の人的・物的資源を確保することが不可欠であるという点であった。ただ満洲を植民地にするのではなく、中国と組んでアジアの盟主となる国家（東亜連盟）を共同で建設して将来必ずあるアメリカとの戦争（最終戦争）に備えるべきであると言う案だった。日本人も国籍を離脱して満洲人になるべきと主張。

その後帰国して参謀本部に戻るが、一貫して中国への侵攻に反対。日中戦争後の講和にも奔走（トラウトマン工作）。1937年に関東軍参謀副長として再び満洲へ。彼の構想とは似て非なる満洲国の状況に失望。「石原は満洲国に身の置き所を失った。」（「キメラ」、p151）

1938年に罷免されて舞鶴要塞司令官に。現役引退後は立命館大学で教鞭を取る。日米開戦にも反対。東条英機と鋭く対立。東条の暗殺未遂事件に間接的に関与していたとの説もある。

「世界最終戦争は航空機や大量破壊兵器によって行われる殲滅戦であり、これを戦うのはヨーロッパ、ソ連、東亜連盟、アメリカのようなくつかのブロック化した勢力である。最後に東亜連盟とアメリカとの決戦となる。これは東洋の王道と西洋の覇道のいずれが世界統一の原理となるかの戦いであり、この戦いに勝った国を中心に世界がまとまり永遠の平和がやってくる。」

彼は、最終戦争論から、大太平洋戦争はまだ最終戦と見ていなかった。ややアイロニカルな見方になるが、米ソ戦は言わば準決勝で米国が勝ち、今は決勝戦の段階が始まっており、米中二大覇権勢力の争いの時代になっているとすれば、石原の予測と比較してみるのも面白い。

4) 満洲国の建国と統治

1932年3月1日満洲国建国。溥儀が元首に就任。最初は執政、2年後に皇帝に。関東軍の方針。「満洲を完全な独立国とする、日本の言うことを聞いてもらおう、国防は日本にまかせてもらおう。」実際に軍事、外交、立法権のない国だった。総理大臣以下の閣僚は中国人だったが、実質は日本人の補佐が権限を行使。官僚組織も二重性。実質は日本人が業務遂行。待遇にも大きな差がつけられる。

日本人側の根強い差別意識。中国人幹部は日本人の「ユウエツカン I に辟易。国籍法が制定されず。「満洲人」は生まれなかった。教育制度も日本のままだが持ちこまれた。日本人だけの学校教育が日本のカリキュラムで行われる。それだけではなく宗教制度では、溥儀に清朝の祖宗を祀ることを止めさせ、アマテラスを建国の神として日本の神道を国教とさせた。

※宝田明(1934 ー) (私の通学していたハルビン白梅国民学校の上級生)の話

「4年生からは中国語の授業があった。6年になるとかなり不自由なく中国語が話せた。中国語の教育は相当インテンシブに行われていた。敗戦後の混乱でソ連兵から銃撃を受けて重傷を負う。ソ連は国際協定で禁止されていたダムダム弾を使用していたことが判明」

帰国後俳優の道を目指す。撮影所では満洲帰りの三船敏郎とか森繁久弥とはヒソヒソ話は中国語で会話していた。

1932年8月、「日満議定書」によって満洲国承認。

※矢内原忠雄 (1893 ー 1961) の見解

「いかに高遠な思想を掲げようと植民地は植民地の法則に従って収奪の対象としてしか扱かわれない。」(「キメラ」P188)

中国が日本の満洲全土への侵攻に対して国際連盟に提訴。1932年3月リットン調査団が結成され9月に報告がまとまる。満洲国建国はこのリットン調査団派遣に合わせて慌てて行われたとも言われる。「現在の政権は純粹かつ自発的なる運動により出現したるものと思ふことを得ず。」ただ一方で「この地域の安定は日本の協力無しには実現出来ない」とも述べている。

1933年2月24日国際連盟による満洲国不承認決議。日本は国際連盟から脱退。

総会の途中でイギリスからの調停案(米ソを加えた和解委員会の設立)を拒否。(「加藤」P151 松岡洋右からの調停案を受けるべきとの切々たる内地への電報)

熱河省への侵攻作戦の愚行。天皇はこの作戦に勅許を与えたが、国際連盟での審議中にこれはまずいと気が付いて勅許の取り消しを模索するが実現しなかった。日本のリーダー間での意思疎通がいかに不十分だったかを示す好例。

決裂を主導したのは外務省。軍部は調停案を受けるべきとの松岡を支持。(分れ目その3)

1935年3月、ソ連から中東鉄道買収。満洲国が買収して満鉄に経営委託。金額は1億4千万円。ソ連人の退職金3千万円も負担。日本が支払保証。当時の満洲国の歳入は1億円。ソ連の軍備増強に寄与。

トロツキーの中東鉄道についてのコメント(1926年1月、要職は解任されていたがまだ権力の中に居た。)

「この鉄道はツァーリズムによって中国人民の意志に反して中国人民の搾

取のために建設された。中国人の不信感を取り除かなければならない。この一掃のために中東鉄道を無償で譲り渡すべきである。」

ボリシェビキ政権は革命直後、旧ツァーリズム政権と列強との秘密条約を暴露し、不当に得た権益は無償で返還することを宣言。このトロツキーの声明はこの路線による。上記のようにソ連は高額で中東鉄道を満洲国に売却したのだが、スターリンが権力を奪取してから ソ連政権の外交方針が大きく変わっていたことが分かる。 この取引は実質ソ連が満洲国を承認した行為と見られ中国側は強く反発した。(つづく)

160年前の日本社会に驚愕・感心・感動した欧米人

臺 一郎

その1. 極東の果てに見た洗練の文明国

徳川幕府の鎖国政策は、1854年サスケハナ号ほか6隻からなる艦隊を率いて二度目の来航を果たした米国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーと、日本側全権の林大学頭復齋による横浜での日米和親条約の調印・締結により、ついに終止符が打たれた。

この条約締結を受けて、1856年には初代米国領事タウンゼント・ハリスが下田玉泉寺の米国領事館に赴任、3年後の1858年には米国・英国・仏国・ロシア・オランダの5カ国と修好通商条約を締結し、本格的な開国へと踏み切った。以来欧米各国からは外交官のみならず、様々な人間が訪れるようになった。ある者は軍人として、ある者は学者として、ある者は使節団員として、またある者はジャーナリストとして来日した。

彼らの中には日本への訪問や滞在を通じて見聞したこと、体験したこと、実感したことなどを、帰国後に滞在記や旅行記として出版した者も少なからずいた。それらの出版物の多くが、その後日本で翻訳され、単行本や文庫本として出版された。それらの翻訳本を読むと、日本を訪れた多くの欧米人が直接自分たちの目や耳や舌で確かめ、或いは体験する中で、自分達が絶対的優位を信じて疑わなかった西欧文明とは明らかに異質な、時には真逆でさえありながら、ある意味で優れて洗練され、ほぼ成熟の域に達している別種の文明が、この極東の中国大陸からさらに海を隔てた東の果ての辺境の島国に花開いていたことを知り、驚愕し、感心し、感動したのである。

彼等が感じた日本社会の特徴の多くは、当時の日本人の国民性の特徴とも言え、さらに突き詰めれば、国民の大多数を占める農民や町民などの庶民階層の気質や気性、或いは生活慣習や価値観などの特徴であったと言える。

ここでは、主に19世紀後半の幕末から明治半ばまでの間に、日本に一定期間滞在した、或いは旅行者や使節団員などとして訪問した欧米人達が書いた滞在記や旅行記や紀行文の中から、特に日本人の国民性や価値観や気性・気質などについての記述部分を紹介することで、当時の欧米人の目に映った日本社会の特徴を描いてみる。

さて、その前に、マシュー・ペリーが黒船に乗って浦賀に現れた19世紀半

ばという時代における国際社会での日本の位置づけなどをごく簡単におさらいしてみる。

国連経済社会局の推計によれば、19世紀のど真ん中、マシュー・ペリーが最初に浦賀を訪れる3年前1850年の世界人口は12億6200万人であった。今現在2018年の世界人口は74億人だから、1850年の世界人口は現在のほぼ6分の1である。で、そのときの我が日本国の人口は3200万人と推計されている。今の1億2600万人と比べると4分の1なので、随分と少ないように感じるが、世界人口との対比で見れば、特別少ないわけではない。また、同じ1850年の欧米列強国やアジア主要国の人口と比べてみれば、なおのこと少なくないのである。

ちなみに1850年の米国人口は日本よりも少ない2300万人を少し越える位、英国は2300万人、フランスは3600万人、ドイツは3400万人、ロシアは3900万人であった。参考までに米国は、19世紀の100年間で猛烈なペースで移民を受け入れた結果、19世紀末には人口は7600万人にまで増加している。なお1850年に世界最大の人口を擁していたのは中国で4億1000万人と推計されている。また2位はインドで2億3000万人であった。なお18世紀前半の世界最大の経済大国も中国であった。1850年より30年前の1820年、中国のGNPが世界に占める割合はなんと33%であったという。同時期の英国は5.2%、フランスは5.5%、米国はわずかに1.8%で、日本国は3.0%であった。

一方、国民の識字率を見ると、我が国の凄さが俄然目につく。この時期の日本では、地方の農民や町民の識字率でさえが50%近くあり、江戸市中の中心部に限れば90%を超えていたと言われる。これはもう間違いなく世界一であった。ちなみに同時期の世界の先進国である英国ロンドン市の下層階級の識字率ですら10%程度であったという。

但し、徳川幕府による200年以上にわたる強固な鎖国政策により、極東の果ての中国大陸からさらに海を隔てた辺境の地に、そんな社会をもつ島国が存在することなど、一般には殆ど知られていなかったのである。

海外での思い出（2）

森永善彦

アテネ（2）

先回に続き私のトヨタでの海外勤務時代の話の続きを致します。

先回はアテネに出張で行った時のアテネ到着時の話をしました。

その続きです。

さて日中はトヨタのギリシャの代理店に行き業務打合せをし、終わるとホテルに送って貰いました。

業務打合せは朝7時から昼の3時まで昼食抜きで行いました。

その頃のアテネではこれが一般的な勤務形態の様でした。

私はそんな事は知らないなので、昼頃になってそろそろ食事に出掛けるのかなーと言う素振りをしていた様で、私の仕事相手の部品部長が「ひょっとして空腹なのか？」と言ったので素直に「少々空腹である」と返事をしました。

そう言うのと暫くして雑用係の少年がサンドウィッチとオレンジジュースをお盆にのせて持って来てくれました。

しかし打合せを中断することなく、私だけサンドウィッチを食べジュースを飲みながら業務打合せを午後3時まで続けました。

3時になると今日の仕事はこれで終わりであると言って、英語が話せる部品部長の補佐役が私をホテルに送ってくれました。

(部品部長は英語が全く話せないので補佐役が通訳をしてくれました)

なお付け加えると、車のアテネ中心部への乗り入れ規制をしていますが、街の中は車が溢れていて、ホテルと代理店の間の移動は往復とも渋滞の中結構時間が掛かりました。

ホテルについて夜の食事の約束をする事になりました。

相手が今晚は何時に迎えに来ようかと聞くので、雰囲気として余り早い時間はアテネの流儀ではなさそうに感じて、遠慮がちに8時ではどうかと言いました。

それでも相手が少し困惑した様子で8時は早すぎると言うので、それでは9時に来てくれと頼みました。

実際にはアテネの大半のレストランは夜10時スタートです。9時でも早すぎたようです。

暫くホテルのバーで時間を過ごしてレストランに出掛けました。

その時は確かギリシャ料理(肉、魚)のレストランに行って1時頃ホテルに帰って来たと思います。

ギリシャの料理はフランス料理の様にやたらソースを使ってこってりしているのと違い、魚料理も日本人の口に合う食べやすいものでした。

「静聴雨読庵より」

尾関陽四

サロン・ド・ミュージック・クラシック (第6回)

(7) モー、ソアルトの協奏曲

6回目の「サロン・ド・ミュージック・クラシック」は原田さんの主宰で原田宅に集まった。私と山崎さんが参加した。テーマは「モーツァルトの協奏曲」。

尾: やっと、ポピュラーなテーマに戻りました。モーツァルトの協奏曲では、ヴァイオリン協奏曲がどの曲もいいですね。ピアノ協奏曲はどれか1つを選ぶのが困難です。管楽器のための協奏曲はどれも聴きたい曲目群です。

原: ヴァイオリン協奏曲はやはり3番と5番ですかね。フルート協奏曲、フルートとハープのための協奏曲、クラリネット協奏曲、ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲、等々たくさんあります。ピアノ協奏曲はI3番以降愛聴盤が多いです。時間との勝負になりそうですね。

原: 山崎さんのリクエストを優先しましょう。

山: ポピュラーな曲であれば、何でもいいです。お願いします。ついていきますから。

原:では、『アイネ、・クライネ・ナハト・ムジーク』から。ベームとウィーン・フィルの演奏です。

原:同じ演奏で、『セレナーデ KV・388』も聴きましょう。

原:次は、『フルートとハープのための協奏曲』。やはり、ベームとウィーン・フィルの演奏です。大好きな曲です。

尾:やや通俗的なところが気になります。

原:次は、『フルート協奏曲 第I番』。これも、ベームとウィーン・フィルの演奏です。

尾:私はこれの方が好きです。音楽の格が違います

山:同感です。

原:そうですか。

原:ヴァイオリン協奏曲に移ります。尾関さんと私の用意したのが凶らずも同じで、オイストラフ指揮・ヴァイオリン、ベルリン・フィルの演奏盤です。『第3番』と『第5番』を続けて聴きます。

尾:オイストラフのヴァイオリンが格調高く、それでいてケレン味もない。最高の演奏ではないですか。

原:いわゆる「弾き振り」の演奏としては最も成功した例でしょう。

山:『第3番』は録音レベルが高いですね。

原:いずれにしても、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲の録音としては最高の達成でしょう。

原:次に、『クラリネット協奏曲』を聴きましょう。アレサンドロ・カルボナーレ(クラリネット)とアバド指揮モーツァルト・アンサンブルの演奏です。

尾:知らない演奏家ですが、素晴らしいです。モーツァルト・アンサンブルのくぐもった演奏も捨てがたいです。

原:残り時間が少なくなってきましたが、ピアノ協奏曲に移りましょう。どの曲を選ぶか迷います。

尾:『第20番』か『第21番』をお願いします。

原:では、『第21番』を、内田光子指揮・ピアノ、クリーヴランド管弦楽団の演奏と、ポリーニ指揮・ピアノ、ウィーン・フィルの演奏で続けて聴きましょう。

尾:どちらもいいですが、明晰な音の鳴るポリーニが私の好みですね。

原:でも、内田光子もいいですよ。最後に、『第20番』をアルゲリッチの演奏で聴きます。

尾:音型を崩すようなところがあってハラハラしますが、調子の波に乗ってしまうと楽しいですね。

原:時間がなくなりましたので、ピアノ協奏曲の残りは別の機会にしましょう。

尾:私はバレンボイムがイギリス室内管弦楽団を弾き振りした全曲盤を持っているのですが、全体におとなしすぎて今一つと感じています。全曲盤で

はどれを勧めますか？

原：じゃあ、それも別の機会に。

ほかに、

- ・『弦楽五重奏曲』1曲
- ・ロンドK・373
- ・管楽器のための協奏交響曲
- ・ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲

を聴いた。

尾：今日の試聴で良かったのは？

山：『クラリネット協奏曲』。

原：『ヴァイオリンのヴィオラのための協奏交響曲』『クラリネット協奏曲』。

尾：『ヴァイオリン協奏曲第3番』『フルート協奏曲第1番』。(2018)

文化講座・講演会

奈良興寺文化講座 2019年6月20日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講

「『福島復興祈念展 興福寺と会津

～徳一がつかないだ西と東』によせて」

福島県立博物館副主任学芸員 塚本麻衣子

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第107回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時 6月20日(木) 13時～ オリオンルーム
2. 講師 本村凌二氏 東京大学名誉教授 古代ローマ史研究家
3. 演題 『歴史哲学としての世界史』
4. 申込 Eメール：shinsanmokukai@gmail.com

電話：070-6994-0137 フルネーム・卒年・所属(紹介者)記入。

天地シニアネットワークと言って申し込んでください

5. 会費 一般2千円、婦人千円、学生(院生)無料、茶話会ありません
6. ホームページ <http://jfn.josuikai.net/ircle/shinsanmokukai/>
7. 今後の予定

第108回 7月18日(木) 『日本の財政危機と税制—消費税の基本』

森信茂樹氏 中央大学大学院教授 東京財団上席研究員元財務省

第109回 8月15日(木) 『昭和史からの教訓』

保阪正康氏 日本近代史・歴史家・ノンフィクション作家

第 110 回 9 月 19 日 (木) 『揺れ動く朝鮮半島情勢』
平井久志氏 ジャーナリスト 元共同通信社ソウル支局長

特別講話会・第 6 回 6 月 3 日 12:00-15:00 如水会館 3F, 富士の間
『戦後の宰相論—戦後保守政治を顧みる』 浅野純次氏
元東洋経済新報社社長
会費 (昼食代 3 千円) 申し込み受付中。定員約 40 名。
新三木会代表幹事 則松久夫 070-6994-0137 090-3813-0137

事務局

<投稿>を歓迎します。

<プリント版・郵送>

メール版を編集してプリント版を月に 1 回発行郵送しています。

お申込みくださればお送りします。一応、実費として月@350円(4200円/年)をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・494号

発行：2019年5月31日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒116-0001 荒川区町屋 3-2-1

ライオンズプラザ町屋 703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651